俳諧一葉集

後編

二

へ 5
4393
7

俳諧一葉集消息之部

古学庵佛兮
幻窓湖中 編
坎窗久臧 校

一此俳諧よくこそや堅は切てむつかしき物を点に付候は古今まれ
給り候へん只今さ堅まくらく御句もち候て其の平日の端にと致
しそれか様に古き道にかけてむかしの俳諧まで心得し写
随分致してしかれ候て書ぬ秋の任りて一様ならぬ事
申し置候て紙に候もの也且又さなしく山高の縁の花見之御事抜き
計らん候て古謂の其点は古来候まゝのそれなんすへて三良堂の事
あのうちは作候て御覧ならず急見かし候は難しくそれゆえ

門 人 5
號 4393
巻 7
昭和九年七月二日 購求

[illegible]

三月十四日

東花子稚文

芭蕉庵桃青

桐葉子稚文

[illegible]是又[illegible]十[illegible]

季夏廿日

小春稚文

[illegible]

此中ゟ十題をえらて其意の教とす　小春

○

道徳抄

そもそも道徳の二字ハいかにとしてハ心すなはち徳なるかゆへ其名を神もしかのみ
んといふもしれハしれをえらく月清く地ハ是をえてや花咲く
鳥と魚とハひとつめにへて其ものし死るハ風ともふれて徳ゆゑ
ものそ学ふ生の飽くことなれと蛇ハ底に徳んとすれハ
うしのめしハとみきたへらんとをさむるとしふれく
然しのふんハ徳ふ時の心すゑんよそめしの生まれしらの外れて二
飯ゟ鼻のうけたるためしもいふんかするさ徳云とハ先すて
其しふきとハなれの語ら徳んさくゝしかさらん其しすに
しく徳ふ人ハ其すいりて何人をや其すり実いり実いりの

実を徳ふ人ハ実をしてそのし外ハ実をかくありてするいふ人を
心ハ時のあまりかくうき其しもへて苦ると実いり実とや心いかハ
虚実ハ虚すりしく身生まてしもの草間りなす知徳や
心しまさ教育の花すゝ其入をしれして素より実とても本も実てを
徳を以ハすこし実とをして実をとこるのみすかる聖人の実とそして
今の人すらかくし徳ハさらんや此有まさす承るハ円ら徳て一葉
抄の時ハ限人を心をハしみ有をる抄のみそ大家をもて徳ハしもむ
実しくまの徳ふものてしてま徳貧福ハ人の其しふかり

一　道徳二ひとつへなるゟ何と向ハ言ふ所ハ其道しそく多くさして外に徳ゝ
ものをとゝ涼しく其しうもしハ人をハ在りもしわふまつれくハ約
生れの盃を心ありてくしおちやまを

三月廿又　　　　きき我

三

竹亭文

○

山寺や桜さくともしらぬ山ふところ山中の草の奈良
けふもされ来てみる人もの住むも思ひて叙の中の山をのつらき
山路のけしき山寺のさしあたりしくさまにて

くち銭

女角按

○

山を錦摩の尺屏風かい切手続浅草のおはゆるを一方に分
る様釣を向ふにおのれの川付つ入手にて礼をして丈晴らしい
一方は人家の続茂して残光り暁ても夜もさりし残錦色がしら紙のつ
まりく立よ一の手や

秋のれゐぬくのみて爺とおのゝつくり
さつくさんやもとして翌みきりし頃
ッ国桜ともへ雨の行べて初ねしくハか見おと白銭手おまゝて
三を上がほし月

らみ

ち銭

日を社兄
ら

○

一石清水の瀧本坊法印の従へ持る五番合わせ立一の訛頒らる礼八
手込まま
毎夜くう七ッ八ッてえし比ねをすゝんハ
りな一の加りしみものうらま
さとしみとしるか柱寄井を及びきふくの丸やいは待る志す
余も一ろをきんとして柱寄れゆゑをもちく

弁慶も文もかみこみ羽折かな

これや精一といへるは むかしの名ある人の口に入て文付ひらくなし

ちよ紙

○

一とせ芳野に郷なる者に金子二分かしつるを 預けし 押付ぬしに

ゆゑ返済すといはれとも今はなき人となりて文よみて

ましくもよ

ちよ紙

○

木槿

為紀の人附るやうにより江戸井ある人舞しをりて 熱借宣こ

[illegible]

[illegible] 東武にはじめて見つの[illegible]

紀尾

手附る

蒜のかくの香や手まくも其の先る

よろつ[illegible]

尊の名の花は路地とよみける

ちよ紙

二月上弦

木国桜

文匹書

[illegible]人の[illegible]

[illegible]

京の者は古今一枚ある此切京中定る人あんなし信したる文
の内をも拾ひとし何も添ふく小摺集呼光も書文なる人定ゝとし
有題の工夫可笑しきを見せし花須ひろめ〳〵更の手柄に依て

貫古堂　菜園集巻七

春調仕舞

蒜　けふの紀千鳥のねころとなりの見人待ちて
蕎麦の雨の花の跡は鈴もよし
木をそうお〻く　おとろかす〻つ

二月六日　　木園

さるも我様

称美の詞

柳樽川の翁ふうするおもしろさ一句一ツに〻ためて句は誹風今年
まて此道の人なきにして十八翁は此を〻かの翁の心をよく味ひたる点者
は名をえ未流しらしめたる人二分同物を同物付たる古今妙要
よく称する人二分見そをみれのしるしといひをせよとしてし
所と味ふる此事も其れし〻しかたも志ある察の士は一為人
まてしくをも黒をと漏つゝ句様さるしさをゝ行て盃前
の其らかりしてよりは未練翁は是知る人と定て美く八翁
料簡は定さ尺る翁は京将をし和更集一巻の遠年今は
冥加し

句様の詞

古状を人翁に様を付して同定さるも家定としいふり
まして其を鳥を付して一物分気を附ては当世対志未来に
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　さるも我

作者の此句とも似せさせれ古往今来未来一句の教へつゝ其时
ら秋風来て芭蕉の葉もろく破れんとするや此一句一生これ
のこになそうらゆしさらら鼻高くおこなへる肩のかゝり
胸さへおそするやうにおかれしは

○

飲酒一枚起請

もろこし我朝のもろもろの上戸達のさたし申さるゝ酒にあり
もせかふれ又かならんをらひ華々のごとく飲む酒にもあらす
只酒を極楽の為には南無阿弥陀仏と申て疑なく往生
すると思ひとりて一杯のむ外ハ別の子細候ハす但し三銚
四銚の肴と申事の候ハ皆決定して盃きはまる酒肴
おもふうちにこもり候也此外におく深き事を存せは大酒ハ二尊の此

酒の神のあはれみにはつれ本性をうしなふ事ハかならん尤上戸の人ハ
たとへ一代の法をよく学すとも一文不知の愚鈍の身となして下戸の
ともからにおなしくして上戸のふるまひをせすして一向に酒を飲へし

右飲酒一枚起請ハ當歌舞伎の役者の手にてむきなる人の請ふに
まかせ掛物にして床の間にかけてハ何となく酒に心ある
ちよと寫しもちいまて大酒をきらふ氣の毒ハ文句を
寫して大酒ハ無用と有し例一句

飲ての和子ゑもめしくふ男ハの子
ぬすきのきらひハやうしる間ハすゝ茶そ菓子まゐらせ

十方

艾角文

某線

○

去年ゟあなたへ申事とも承度候 手帳清書いたし候

清書遣し申候

一 當年も氣まゝの句

から崎の松は花より朧にて　芭蕉

山路来て何やらゆかしすみれ草

右お三句ともに秀句にて候

一 此秋は萩の頃より左様に存候処是非とも此方へ参り候 花の一見を

くとめあらはし候て句論の事是非共とふらひ候筈に存候

其内何かと申候

一 其前とかく病身に付人々へも無沙汰仕候 返事申遣候

かやうの事にて候 其久しく申上候 猶期後音候

恐惶謹言

一 深川ゟ武江へ遣し候返事とも遣し申候

五月十二日

芭蕉桃青

千那老僧

○

己が上はしるし候 翁京都にて大かたの人々へ申候

御状度々申候 かくして御遊覧の事のよし

其外之様子承度候 日本はつれ(?)其外の風流も御座候や

此方事このさき所々にて候 いつれともつく老のゝ

是非共此方へ参度候 いさゝかの事も

不得寸暇候 其上病身にて候 筆紙に尽しかたく候

よりて各同談ハ一句の外に自然発意の妙ハ志有て須臾
変じ席において新以案じ置くべからず出しおくべし牧
童しも可然にはらかあるべし

正月三日　　　芭蕉

とある
そう談しけるに山本の六ツ後よりなりし米積ハ此日とよほし
此後一二枚ハ其をよしみ見て志る俳諧の道見えざりしくはせ

○

然るに今ハ見学を安して先するも新古るかな鄙なるや
らしある人仕立る様になかなか成る事も宗匠あるは作法
口伝にいはれの儀あまた行ひて成人ともさも流あり
書し有は筆道三物の事をのぞき長中にて是も自筆ニはず
まくらに心がけて又は仕ふに付くる是を筆道の大事也

やさしくつくねてもしらぬ耳にとゞまりてかひなく候ぞかし
礼恨ハ此様
一句作先上着に付候てハ此道を専にしてこそ古事のさしおきてハ
此道のみと覚しての稽古見難き事を知てこそ云ふ事にて候ひ
唐やの呪をとしておる
一風雅の道励大方世上ニ有事にあらで点者へ屋敷をも参り侍
席をも筆ひそかに見侍しては作者付加れども風雅の
らんとえものに似たるも点者の書事をえこくして席主の杖を
ふるうし又例をもきんてんまさらすべし又そこのめ事ありさ
用ゐる屋八世上をはなれ人ずいぶんよろしと自称す二巻
三巻も点取勝るものをおもふ席するものも志ひて悦ぶ
にいさ又一巻もれなくみそのより線香五分の間に工夫をとめるし

謂ずれば点外より異なるものを悟るが手のよみなるべし
ひとしきれども料理をとものへ酒をも飽きましにして貧なる
ものをたすけ点茶を肥しむしろと見すさ茶の趣きの一
節なるべしその又志をも勉め情をも慰め行ならぬ茶の是非
をとりふれられより識の名をも入あくまで茶ならずしくくるる
定家の骨を掲げ助行のすぢをたどり楽天が椅を流
ひ杜子が方寸に入へ家族数節をかぞへて十の指をふ
さすまでも別此十の指をそくし能とは情は仰ける事一方なし

一 諸通るものは大坂にして是は伝いくしもとのふるの指なるを以は
其志ここ手は及より尺し来るものなるてそ想すたよりを至る
助行能因の書状八あるよしくや平生の人まりは当世の人
言行のさまとおもすに伺此不審ら一かへて見る事は捨いて見ん

不通体なしくは伝へ知ることへてかくとも風雅のさかさかは
あるとしまへむかしの乞食よりはまさるなれ

二月廿八日　　てる我

如水様

○

酒生か士族にし此度玉稿とも下さるは此かに以て不
気にて得信のかきつけとも見き

一 西名より家親の自称文にとは文中指さしてきり何よく文通
不仕しは定く此名をもの二日るうちをさしいてまみられは士族とされ
ふりは此方にさへくまへ士族子細まて意見す一通して承知
あひさつあるは

一於今度ハ成人おゝき女の道をすゝめ申候ハ

霜月一日　　千代

如月様

○

芥鶏等候て御尤に存候母様ハ内室むすめ子の事さへ
めでたくおもひ捨候事能々御聞のひおし覚悟専
よし是の事候

一乙御方へも身分の事ハ猶さら入らぬ乙が方よりも申候
のたしなミ其外何事も無油断申へく候

一家内さしてなんの外よりハ申まじく候事大切の事
精出し何事も御心安く申入まいらせ候ハ人とゝ承候

くれ近き日の内に同じく出度候これハ大切に存じ
様子御聞なされて下され候ハゞめでたく存じまいらせ候

一同じく存じ候て清き一筋にさしをき候て
上は厚志難有存じ候て一筆申上候

一窓の梅の花ハ深切に思ひ候て爰にも満ち
行く境界大切に思召し候様に申上候

おもてむきの花に付て御そゝろに候

八重の花もとの園の事にて見事に候姉妹
みあらしの風の吹く事有之候ハゞ見苦しく候
うれしく思召され候

○

山里の花に申候事も申の山里に引籠り居り候て其方へ申候

くゝの新造の頃より客しやれさんせ様々なりの少見え候
の身を受くる大丈夫成ん玄米丈字より御熱心なる方々にて
名字を命じ候て古人も〳〵みなわが名にて候はゞ御身にも
さのみを申しくもなし御覧なされ此度の新にかゝわれ
すゞや恵みたし忝なく存候百姓残も有きて能き待遠
みなし

四月廿四日　ちよ代

小枝丈

御前　蝶々のされども七八歳なりし　小枝

○

此君より白米五斗差上申候
一斗俵にこしらえ越よとしの坂

かくのごとくみなみな手なへ四殿かゝるかくのすゑひまいれ
色よき事もなくその大病見えるよく
え　りや　墨の上手　米たまる　小枝
まして恵ん料　銀代の事も抜かれしとさけるものにてさん
るかくは非代の白八ッ武部くも分お通に情の寄られ安
候に米俵八つ包み通手婆おめぐみさくしお為米直
米屋にお通ると八名四まても我概なる紀身のまに今年
天下に当りの米直なるべしとも京大津の作者も我翁よく待

四月廿四日

小枝様　芭蕉

誰人の菰着ていますか花の春
旅人かとも恨のほかの縁より入申候

蕪をえて狂人いはれまじとも

○

然るに約束して大雅翁の併せて此さまの人こそ少なけれ
女子なれど集り来るを若の枕かさねしくは御免なれとて
まり一句書きし数人を吟じ言吹てかなを下げし快かりし
席上にも木の葉より世にいでは財ある者をも遊びては佳き物には
あらず雅翁俗なる人は俗人くとおもしは何ぞ新なるものを見てもみなのは
らしき庵にて粗の言も文字は何れてもお庭の室の物翫玉
人は謝礼強ひてくは殺生の茶有るやうに雅翁翁も出
吹くは初のしくは御所の奥の辞をたくみして秀ます歎る
うも俗なる人のさし字こそより調子一つ付けとは申しは候と
やとお遠ざけし名高き時しとまうさくつきとさまのまへくすまとの

風人ふ見るれは折くれむまとしてほく殺さむまとくもなきぞ
流球うとしるれるをもら世をお教へ入まかしひとひもなけれ
家の為大同じうるしれをも心付けす罪をとがめしく是れは二十五許
詞なくもられは其の前の更なるれうとしまて樗櫓子小鍋の俳秘
のむすて御の人とも語りまいしきすみすく人武林者中に
ゑちまへのたはかの家箴放白鷗の詩示めとお訓ひもらめ浮
世の家中の人くもしるいすそ吉お芥をも此することうしきて
しらひすや餅に妻する樽の花

二月十六日

一茶　樽　上下

芭蕉庵

又武士は殺生するものならとぞ人々皆して風流の道なるをも梅に鶯
うさぎをも加へまさくは其外の次ぐやしきたなしとはそれしの嵐山

しまふ台これよりかひものして料理などハ恐れ多く候

○

附合十七体ハ我に記して神人も足をとゞめしく候御の付ぬ

ことば付味を付んといひて一句を詞に附え忘れぬ

ゑすゑものは又むかしきまもの作り附味とても付まゐ

浪く人まゝそのくし候御付ハよほく掛ハ一句一体ものゝ候

甚むつかしき事なれし人の付わける事を是ハ皆様に候ハ

情ありとも発して付し変化なしよくめでたきよし候ハ

人ハ新総三句をおそれて待たるゝハいつましておるのみ

談し候ハ細心を尽して協和不しで二三句も附る上手学

御了付るも発るに例なきをもてるとくありけるものは解了に

若ミ級のなり思ふに談捧ましても有る門人の中にも七人

あしく例法談せしかバ右等にまかしく候付合の衡まで云よりかぬ

人都て生てハいかやうよう候てハかくしやもきしハ参候て十七体

をもほさるよりの変万化の衡をとてもいも品付て付ぬるよしいふ

まづきり知て付合ハ千変万化と申なりとも人々にも候ぞゆうしくは

十七体の法よくしるべししておよそし千変万化の働きも出来申候

百韻千句に及ても附心一二体をも存ぜず候ハ知ざる者のハ只ひとへに

小器ハとやかくといふ案おほく候えば人に続けて通し申されまじく

あふはゞ只此人目の速弁にして互に能をいそぎ一言博に

加けるし八体法遠からずとも付られ候も好き尽しく候

ゆるし申候ともめしてたのむ

六月廿七日

ちと紙

談林まんの当手ひく清氏殊

小枝様

○

名月を懸り候て存れ候て[illegible]八まさいろと定め
かくては名月も[illegible]て[illegible]人をめ[illegible]
[illegible]

稗の穂にとまりけしきかな

[illegible]
[illegible]

枝様

男なりよのも都や秋の月　ちよ女

八月四日

千代枝

○

[illegible]秋の[illegible]大[illegible]
[illegible]
[illegible]一入[illegible]
大丈[illegible]心を静[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]秋[illegible]
[illegible]痛[illegible]
[illegible]方[illegible]
手[illegible]血[illegible]
[illegible]方を[illegible]

れし学者風雅の姉もやゝかりて又ミ申まし候にて有
いかにも随分学者ハ節てかね能書能筆生涯のうち
のこしおもしろのしひのかれおくりもむつかしくら
ずして及き館し

七月十六日　ばせを

牧童様

○

去年ハ落し候て其文ミもむかしかましく存候也此よ
ち年し若狗出し大坂よりして直ハ杉風所にも参り候
中々ふ文ハ出して件の手模まよくなり候間一人ハ有し迄ひ
此中出林之入毛ふそくに一句申候

蕉　も　や　如　臥　膝　て　元　来　丸

○

五句のしらせし此波丈へ申文ハ句此中ハ其之
ひ見て句作仕廉末ことてゝあし候ハ無てそ
ばせを

卯月廿一日

去来丈

一　夏の句の見り御さるゝのみかたく候ハヾ御世
此度の事とも左ん御持ち枝本手紙ニ又一ハ家の門人寺来にも
ろまのこく手の上れきりして又其手来の也のし師弟の撰集
柳ニ相ひくのみ会も御同申候にて見聞候まゝ入人付まゐる
と申しさる二度御出人々と思ひ之しくるかなしく存候事のま
ともハ其かつと引付のまた候ハ何ぞすらやとやかに存候
しく候

卯月廿日　はせを

此筋丈
千川丈

なを人々へことつてたのみまいらせ候

○

一此芦原庵にての句　物書て扇引さく名残哉　立申し
松岡にては翁は北枝に別るゝ時の句也　北枝は金沢の人　蕉門の
俳諧の式作法を人の授るはなくて手より上る人の句に
きゝて其句を正さるゝへし　これは翁の授る句の明らか也
句にちかくもふれて北枝見るまゝに申しつくし其人をも
又申し山中の湯にて三つ物のうち其句にも付申し
此庵へ身しくもこの物語りをも申し入てよろしく申さるゝ文字は句草

おもふ事をひろふてうつし申し山中の湯にて此句を書也　本文章
に此句も其旨に附るなり翁の申されし北枝に別るゝの三句
めぐりていふ事は句の書きたる事のなし又申し此集は西の方にて書出して
先年翁のすゝめさせたまひし人の句をも書きて俳諧を見
事に其句の絵を許されし俳諧に奥の細道に任せて申して
俳諧は何事によらずをのれしるのをのみむねとして句の同行の誹諧
さへ人々の新しみて根ざしてうたひ出すべきと申されて二十
余年のあひだ師の茶亭に住て情あらはしおのく二人かれこれ三人
おのれ一人も遊ぶことなく心を和らげて句を捨て宗房殿の
のぞみにて其句をも誹諧のかわりしことのことくぬるまのこと
まとひ句も残す事なく今此句に其心得ありて後の其句に其事を
同じく初心ても十人もおもむきて力をそへてそれを又決定の道

つまから入ハ又ゝ暑居の段ハ万子牧守秋の坊ちや小きれ
の英勝ハとつくるまでしまるなあり

十月十三夜　　　　　　　　　　　　さて哉

小枝揃

○覚

一　もち米　　一升

一　くろ豆　　一升

一　ゆるされ　尺合

右之分量の秘合をもつて日ハゆるく傅言之枝をゆるし
のしる茶ハ一森三升すまる俣山すこしへいかしを称ともよし
いかゝちら入てよ

十八日　　長八格　　　　　　　　さて哉

○

山路月　桂　雲　門　餅

屋坂　松　葉　越州　茶

御法ハ障子おひらくるのみ　松

吹ちらふくろすうひすの声

此のとまる俳諧の変化をしらし許らす人を喜ばしむ
又情趣をもつて喜ぬ贅情と蕪子吹ぬ俳諧ハ大すく哉

ものではしまらく

蓬　深や　露を　ゆかしの　声をのひ　　　身

はかくる秋のしくきよめ句をうけとは

十六日　浪化様　桃青

○此比ハ俳諧隣の方も来り候へ共そつ〳〵申去りまるの〔?〕候　寄足上
いつもしれむ其角ゟ嵐雪なとも事中候へともたよりも少く
幸にあり申候以上

廿二　たまも様　去来

芳翰拝見四季とてもつ紙写候　去来

○御相應之御用事なとも候ハゞ仰下されへく候
とのつこゝろさし　追付参上

桃青

又こゝん小舟の中山御ゆるしを

○申越候鉢山之句ハ委細御無心一盃〔?〕の
むかし剣〔?〕客の先棒を取〔?〕囲入中山を四五枚ま〔?〕
存し候へ共今ハうちすて申候

七　散風丈　去来

○二白俳諧少様んし先を改申もの、すへ〔?〕んまた心得ぬ俳諧
肝要にて候　白老ハ鉢山へ心得て気心得たる人ハまれ〳〵御座候

まのまえしい

一季の宗匠の名書のむこは更ニ八ヶ年くらくらし考許占

もし入て増ふ升の月の興

十七ヵ

暁ふ起　ちとせ

○

余ニ白猿の称くらひの老波系有し帳嵐ハ吹乱中は

おすかに乃鍛をみえし焼け是数おおく孫のお節宿行

七ヵ

三頃起　ちとせ

○

新春一升第二ヶ油の中の気泳来升ヶ六百年の落清く鶯麦

抄一ち不堪許二百人余ゟ行し

ゑ油ふくく釣る丘や畠の月

○

数條風動き繁し家の後て本殿中は隠ホ年んくく

物おここかや白みもし

数風起　ちとせ

おみくろ起

○

口上

口上ゟかれ前しう古大根

此うち諸中も動く通勤学流古風秋し張足不世箱見え

三人ゟの一輪は頭お御しきよし一ちかの中ハ此方の此　旦宗

京都正治矣鈴木小栗栖大坂改七年ゟ愛見て御徘徊被成
書通なし候へとも此頃前の大坂様御用中ニて和歌も
承り候事とも御目出度候

廿四日

芭蕉 庵

素堂先生

○

されとも風呂より出申候武蔵御事ならね共
卿中の事ころし香くもしきとおもひなし候
二鐘の掛芳情拙宿へ一休致候事存候ハんとする香本
きひしきの掃除書来一査の細くちきの掃除闘五月と
香なと定めぬ所に候香信者候是京室五月の香のとしやうら
向後は猶かゝ覚申候飲方ハ入来所候也

○

廿三日

支考 丈

ちよ紙

当秋月をかさね候て〱命其もかく候て御悦ニ候なを
尾陽越前まて是をも何ら宮かる人々ニ苦て気覚寺大山頭御宿にも
書む月のさしぬ月中さ〱ゆのこ〱も梅の句に和し〱て
過化し〱のす〱こゝにや〱候外伝る旅立し〱候年
さりなから〱拙者の御〱やまの〱も先一韜枚机左右し
梅 花をしらの 句 おもひ ふ〱の事

四月五日

ちよ紙

其角雅生

○

梅か香にむかしの一字あはれ也
一年忌のことくにして御佛前に備候て御志の程推察いたし
やるせなく候
二月十三日　武陵芭蕉
梅丸先人

○

ほとゝきす声横たふや水の上
一声の江に横たふや杜宇
水光接天白露横江にて横ふの字眼なるへし二の句
いつれにやと推敲きはめかね素堂水沾沾徳に文の
あれはかれ勘定のそゝろとなれは両句評を乞沾徳か横
江の句文に寄して声よみは自筆むいこしてくれよと也
江の字ぬきしはそゝろにけなる句の句ひもなしきを
思ひ分つへしの案やかんとのくする内に山口素堂原安適
と詩歌のすゝきものとも来りて水の上の謂よろしと定
まりて幸に此ぬきはりて是句に白露横江より
許文を味合て後に以ん
はせを
荊口丈

○

おりふし実に御かへ御懐かし無て世角も一両年かくし玄武
頃[illegible]て文御一合[illegible]し御案文字候
此作合[illegible]来[illegible]入候
六月十日
はせを

菊掃除する人

あしたの野分の風をみけれは

あらく荒さぬ萩のうねりかな

古庵や風をしる萩の花　其角

○

進るや入きのかさし手綱は遠方中に清き手の細うてかの約束

とは短冊は清書すや法度て八つれとも二三十はくへうつ程なれ

やしれさんへ右の本尺書しくと風手綱もひきの家に

此あつし其ありて何分てとんさくの絶しらし拍子の

まは家の手紙まて八度ひつくは我ある八古文をやは

こ々すれ筆跡と橋ん手のくれ

又此くれし猶くらすくし又外に書しく此まて手紙遣

あやしの上

廿二日

年月文　さき成

○

進るやしきて冬から書にあれ松しえは所の寺に岩きつるの先念

風斗ある事しき成先遊びやしをて

筆の家にも住居つ世をれは家の家

浦くまや名所甲亀此月八流

此為るくしみさし後くや行く風の寺し伐て行しみ無念の心も

粉来あ八頃をて気の葉しをへ入よ

卯月廿二日

風深文　さき成

○

昨うかゝかな茶 多る月見のうちに
在くるや人に雪まかせまして是よりほゝの月よ
如来不しまいらせて此句のとあしあやおゆきりられよう真ニ
そうへ清浄ニ気ら本月来て独ろよりほ許走来くともなし
きれいさよ句の端て旅寝取りくしや入やとし

十八日

ぬ行文

桃青

○

只と思ふ倍を二三人気て係をもしすゞ野居しいさとやくも
めつらしめんいてしあゆをふかめんハほやいてしい酒二升ろて肴入
いさゝか成八清ゑ納豆菜魂さ入まいれけらさる新名やいゐ次

まつ令してしをやしさいまち入日

二日

かふしや荒紙

ちよ代

○

保生佐夏之比毛
志の名ハそまとしまて四手在
お桴尾の茶ハ路情あい
東雲と菊園ニよひて
菊のもとや庭ニきれくろ皆の庭
此彼ところもの四
金屏の松ハ古くさよ色こそあり
桜夜く地見ちぬよしくい追日似体祈一西の有は古きかな

当年ハおまへさまものを以て御誂ニ来やかましく候
き江戸ニおゐてのあそび事のくれし当方義ハ五百付よ義
手脚の織を相仰候此何の織もし御り候んと存候御誂
くやまニ何ニ付方へも久々ニ頼み候而ハ早ニ御一通ニ御座候のく
ましく大坂大坂へ申いまた御入用の品ニ御座候之節ニハ主ニ手の御
性ハ御つくしく御頼み申上候御座候ハゝそうて御取候ハゝ
上方ニ而ハ絵も銭いまた潤ひ無之よしニ承り候ニ付き、御尋ねは、度々相
大きく銭四枚ニ而御座候それハ扇子入用ニ而御座候ニ付而ハ
五匁計の小豆をもやけて御ひて下さ候様一ゑ候様ニ而も
くるしからず候能々御頼み申候而ハ御入用之義被仰下候
ましく

十月九日　ちぎ代

許六雑文

○

遊びに入て此度ニ成御郷ニ而ハ金の絡手よく存候
相国をつかまつり候御九通りしのつきまり候御誂ニ而は申候
久序弁華ニて承り候御郷ハ村ハ京様ニしすり候文ニ成
御郷上ニのまくさまし御誂まてゆるゆる御縁を申上候へし
むかしの方志しく存候あらまし此頃ニ而ハ宮のこいしく家ニ成二三
今年ニ書付候ハゝ法ニ合候ニ無之所上手ニ而御座候様ニ被成下
跨ニ而も未来ニ候而ハの事の業様
存寄候ニ入候而百韻の候御事ニ候得共御満足に存候
おかしき心尽し候ニ付而の事ニ而候得共打出し候ハゝ

廿三日　ちぎ代

秋風丈

歌斎自詠

おもふこと千代のけふる手向とそ

花のかや古くみ寺のなれのなり

以上　　　　　文鉞

○

尾張津川方より宗年もかひよしとくりかへしわたり料理而

はしめ此方丈宗もをそつきへあらし

六句

三十里尾張大根のそゑしかれ　　　文鉞

又

葉染しきぬかみのみ了楠ともりとそ

味噌八ッ橋くわうりかれ日

○

月尾州廿五日にて行脚先を立てめて薩摩の記の便りを二度いつまてとも一代信濃路しん二たる

みなもうつしらん

宮らるや嶋原のすゝきの刈路し

はるかなるへし更衣ぬるまま根の白上ることにしは島八両紙

ともかれのしこ

廿日　　　　　文鉞

綾小丈

○

一桃隣ぬし何お勤とは芙蓉を花経花とを会すいものまへ

かしましくは松風の洲甲で汲さる社に寄りてつゝしめくと
けふ一日の別に宗匠伽藍涅槃の寄句附し玉ふ附閑門伽藍涅槃の川
まくらと埒法けふる社には越子深く拙者にもしより上をもちて学
のちる所の古にて社し和尚宝とも飾所にて合えを談し也ひ
さとなりける古今今昔ゆゑうかゝる桃隣しゝ西坊一句ゆめ
一前にを在の在所のくらに出て定めぬ村をね
一此方京大坂皆乞食をしかけねらつまりなし有まく在つかし
たがひに後しうきしゃれ
一此度は細工人時分せめて相ひ不申社に宝物を付て立ち退り
其跡入そうやしまゐらすえ行かうくなるけて其外のもれ社す
候いづれ宗無あらぬ
一宗匠えて人其つゝもの御方へ有之ゆゑ宝物寄宿先より下人共

かやうにおもひ出しまゐらせておほく候
六月三日　桃青
杉風様

○

言葉を寄て戯正月習
大坂涼中ゟ別におはしなる御伽
全平が方のまくらし八体をうけしるし出と相見びと
かふれしてめでたく候
丈艸
曲水様

○

露に訪れまゐる人々拾番者にて古今集のしく麻の絵を肥前公

よみて先月廿日ハ平林某為念のため來りて京に歸るを見送り
右の人ハ木曽路をもとにせんとの人々に對面せしハ名残をおしみ
月見するやうな篁しき難波がし
ちかき国家の仕合せハ御酒を汲の句作を見てこそかうおもひけると記
すがら秋の新酒をくミ又かはりし此頃の[illegible]
川風やうき柿売るゝ身すぎかな
職人のてしご業ハ能く衆生をかの御恩のしらぬ此の外
世のしるしを見る事よ
十月
加生稲　久成
○
さま添ていと名残をしみて旅のいそぎハやと先づ諸旅人

お代
一 秋冬の旅客ハよろこびの事ハ尤に済足
なし先祖のえ旅行致し家内にて祝ひ子供の祝　前にせ
子ども其のまゝ夫や母ともに安心し仕合のおハ三才次第の御宿
これのしかも家々よろこび待たれける
二月廿五日
許六雅文　久成
○
無事なる天のめぐミにて家内ちから中よく父母の安心をおもひやりて家久し
くらし柳にうつりゆく春の景色のおもむき見るにつけ心の花の色香ハ
年々にかハらぬ精をつくしたく思ひてしかしはしまりしくハ可
笑句もよろこびける旅の客に出て来る事の句を一句

先達て御たのミん人まうしろ依て
此間談しきし寺町の桂田屋方へ参り候處新造入用ニ付これハ
きつと桂田屋より相待ニ付当方より内々へ相談いたし候處
相済候故文通を以申上候又年季方之儀者早々十二枚しきうの
給金ニて相定し候て指置し候ハ右手付として金子入用ニ付右之
下女の人相も申上候處其人の請人の儀も御座候ハゝ早々御
相談可申上候の程ニ存候

十三日

手付文

桃吉

松風様

二月吉

喜代

北りも只今は御噂も承り候事も無之候先御役所へ
一昨日加州金沢より同所へ着いたし候又今日上包きれ候名
をも承り度存候方へ相談いたし候て新造を上包ニ致候方の
当家の風俗并何かの事も申上候へ共相談いたし候ニ付
惟ち申上候事も承り候得共先者
参り候延引ニ及候得共追々是より参上候
うつりかはりや餅干菓子のうち桜の花
御機嫌の事ともの御座候

ふし木むら様ニ相かわり候かしくとやうもり御無沙汰
此折柄御悦申上候何分宜敷御頼申入まいらせ候
此日参上御礼申上度候かしく

去歳杉風方ゟ半紙一束ニ金子被遣 御厚情不浅難有奉存候
當春も何角と間違候て及延引候 嘸可被思召候 御作
なとも是非被見度存候 善主御用被仰付候而 随分被成
御越候様 此方ハ包丁ニ而牛房人参 おらも是非
相見え申候 就夫定家卿ゟ末大炊御門の事 内々申候
も被申候 随分清眼激励之家の分も御聞届被成候
得其意候 大坂ニ而仕旧友風情に御座候 何分よろしく
頼上候 宮本月如窓の枝ニ掛申候 かしこ いろいろ此の此のめつらしく
結構成御礼被申候 何たくみにし随分被成 京都ゟ書状被
然し御自筆ニ而 八兄を以て御拵被成候得共 書状被
よし 御前ニ而 梅をも送りて 此風ニ而 御近隣御度毎 御意得
二月廿二日　芭蕉

○　如行雅伯

此度ハ入来ニ而 御祈念も被成 御丁寧ニ被仰越
之より此程 茶会ニ而 存外御懇意
御見舞ニも不参 御座候 何かと取紛 御無沙汰
ニ而 御待被成候 此方も不相替 罷在候
御前さまにも 御機嫌よく 御座候哉 風俗段
御懇ニ被仰せ候 さてさて 御めつらしく 存候
御座候て 段々 御家命 御はなし 申上候
から 御尋被下候 段 御礼 申上候
御心安く 御文 被下 候 事 共 生
御目にかかり 候 やと 存候

一 先日ハ[illegible]中山道[illegible]

[illegible]

伊賀へ下り候

二月[illegible]大つに[illegible]

霜月廿四日

寂照居士

芭蕉

○

[illegible]

[illegible]みのゝ大垣[illegible]

[illegible]

十一月廿二日

洞水丈

[illegible]

○

[illegible]京[illegible]

[illegible]

網代民部の子[illegible]

梅のみかをりて行やさつき木も梅の花

此句旅枝にてしる所を能まじや人々さし有来るものに
桃青

廿一丁

右梅丈

○

宗匠流とや侍らむ上手の付かたにて五句の余禄しる所なり
りさくハ先行の秋中にて能書も有て式法にて旅しるに下段
為則ハ今日の中にて佐し候はゝ句も文句ハ其のく
やりて書文年月并ハ少也本より抱角しんで其の意
先抱も役を度毎にその上きて此年にきさひし一句
ゆゑにきたる句しまやたとへ硯箱
ゆゑに書そうしてられしくまくて来る句のうちかなし

十一丁

小向やさ紗織

○

此句役目の上の名にて句の旅先に書しての母抱の内にて候
白き手に入る所にて下度をすれし抱えの中に書きて其の所に稿
今にも其の文と書の通へたりと宗書事中にて至り目
しあるゝを手て何とも候にても如旅へ能も一度毎其の給
うらし抱えて随に係りしも其の日度あるしかたの度常
見の余沙汰に此小親子の見出書りもそれ不旅たもし定と也
まりの文とし見文にもとのくしもいの其の如のし
一結末の歌新本にも付きて此の初人ゝに分かれまし其の文の
てし古秋の作に係るもこのしまの大体事をしてもこれに

いまだらち明かぬ事も多く候て千里一通いそぎ申候よし
猶其元へ参りたく候へども又其内参り申すべく候以上

二月十六日　芭蕉

風景雅丈

○

一 當月十六日加茂之祭に一扇の絵を添へ
やり候へ共其人へ入候て持参申候此方へも
参り候所へ仰ね候へども預り申候
御手紙被下候忝く存候
まづは此方一筆申上候

十六日御出候と承り候へば御越し候よし
にて候御待申候此方へも

門の絵をも見申候所に候ば御返事
一二かたへ返事遣し候處御意に不叶候

壬五月廿一日　はせを

猿雖様

○

去る頃御手紙相届き忝く存候
御内儀様御快気の由目出度存候
千里事も打つゞき参り候
摩訶般若の事など
何ぞ申し候の由世界一つと
銭にて候へばさすがに
さりながら見申候

六月八日　[illegible]へ報　[illegible]

○
[illegible]五月末に文[illegible]先大坂にて[illegible]の
旨申し上候
[illegible]七月中[illegible][illegible]遠[illegible]
入るに伊賀に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一　[illegible]八年[illegible]長のこと[illegible]秋[illegible]の[illegible]
[illegible]秋[illegible]

[illegible]大坂にて[illegible]
八日に伊賀[illegible]大坂にて[illegible]
堂方に[illegible]伊賀[illegible]
て翌の日は

菊の香や　ならには古き　佛達
きくの香や　ならは幾代の　男ぶり
びいと啼　尻声悲し　夜の鹿

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

手摘をえて見しかハ桃源をいかて思ひ出すもかなしくかゝ
わつかに桃源郷の話をきゝしにも似たるに居て候つて

九月十日　ひさ綫

枚風録

○

遠からす入てを洋々たる東寺にてそん袋すりとてる○中山と一つ
埼さふしくいへし花大廿六代の通りにもよりて入て谷古袋飛仰く
空きやらぬつきをそよろしく教へては内裏ゟせはそしくとよく
入て侍る一句

袖ほしや袋みうちみ月とも

いつの思ひしく打出す百今とも時為る紙にもくれくりしまする
よそてたりしのにて

廿三日

枚風文　ひさ綫

○

三月十四日伊賀上野を出て三十四日者の佐渡にて百三十里其内舟
十三里かち路四十里余外陸路七十里雨にて滞留十四日
詠の数七ツ　流門　西河　晴峠　蝉　布引　箕面
古塚十三　蓮如塚　来塚　乙女塚　清盛石塔　忠度塚
敦盛塚　人麿塚　通盛塚　松風村雨塚
越中前司盛俊塚　河原太郎兄弟塚　良将楠塚
能因法師塚
峠六ツ　琴引　騎峠　たうけ峠　南戸 岩や峠　小佛峠　櫻尾峠
坂七ツ　粮坂　西坂 ちいら坂　しくら坂　宇佐坂　うらろ坂

不動坂　生田　小野坂

山峰六ツ　玉尺山　安禄嶽　高野山　所々いの峰

槙尾寺山　金剛寺山

此外峰の数川の数名もしらぬ山ハ七ツまけしは

卯月廿五日　万菊

恵七様　桃青

○

霧にいつ一筆の詞にかなひ候まゝ御ひかへ被下候かしく

まつも念仏申候へ

芭蕉も風体も候さゝし御物語申候宗匠も申上

京角まへもてまいらせ候のひとつかしく先大坂の新殿へ

ひき猶くもし御さんとおもひまするは八幡の木下にて

みし、翁宗匠のまゝ申候大井川の舟わたし候まゝのかたを

振舞嵐山新茶の詠めよし作し申候のしる

五月十日

惠七様　桃青

○

一、住まふ事は当年八十貫目の付にて申候

御中に悦ひ申候二人の事に十方をもつてし

てみ候へは、御事は御悦ひ申候御事にて候

一、御事も御事の御事ゆへ御申候

一、宗匠尾張の坊様より御使の人をもつて御上の御事に御座候

かし

一　手紙二而起り候生證ニハ勢ハつえて
一　桃隣ハ中ニ而再會ニ付りに力箇ニ而孫枚風子調八華子帯ニわけ
けれ共箇處一ツ存してとこつもれ

元禄七年十月

一　支考ハ段ゝ御葬深切實ニ而今度此段製薬ニ而院の儀
八則於葬ニ而相きりし

支考ニ而お法の後の字首手へ命師の筆ニ而眞字即て

去来

〇

誅錄ハ與のし漢ニてしおひとゝて

遠物完

一　三月日記

信次ニ而

一　貰白書紙　　同所

一　埋木　　半紙方ニ而

一　新式書入
是ハ松風ゝおとき葬事而ゝ本字ニ而一つ若ニ而支考ニ而
すゝ字ニ

一　文章反故
是ハ松風方ニ而文章ニ而草稿ハ支考ニ而為勢拾ニ而

去来

〇

一　翔釣岸花とし貰白炭俵集ニ絡入ニ而公翔し翁との遠ゝ
このまゝに松風方存ニ而

一　枯箕のくち張紙の写引点

一古今の序傳百人一首拾遺抄是ハ支考へゆつりおきて

元禄七年十月日　　支考判

○

清兵衛こなたへ参り候て歌仙興行の事申候へとも又夜すから俳諧のやう

年々に案し候へハ新しき俳諧一つにも成申さす候上すゝ候へく候

次々の度老人を以て申候はしめたる俳諧の中に十五七六度

すゝめ候方もし通りにくき所おもしろく存候事のよし

十月十日　　　　　　　　　　　　　　桃青

松尾はせを様

新藤八殿へ骨折かたし

俳諧一葉集句合評之部

古学庵仏兮
幻窓湖中　編
坎窩久臧　校

早稲田大学図書

小去法の書る竹の枝ふしをしるにて小集にすゝまりてしかも中守
下集の比にもと俳諧を撰としてわれ其物あるべしとかき
むかしめ寺とたまひて集れのごとくにしめ手かたくから
まゝうかみしらぬものおもんきをしと俳偈をいふ事をしるし
ゆゑ三十余句其発句を今に残すハ古刀折紙の式作法をよくの躰
其ちかくに手すこしにきをしこれハ集中のとまたれにはしに
見ゆる所のひとつハかめり今をさて其句を見るものたれハ又作の君

発句をも数宜めるハ言をなく神心とてハ小うたとさへ
うたひさゞ雲の縁をひろふし大かみ心をゆるさん事所せ
と我おほん神のみやしろのためにけさとなしぬ

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏宗房

釣月軒にしてみづから序す

貝おほひ　三十番俳諧合

松尾氏宗房撰

一番

左勝　三木

みほひのゝ色や伽羅ぶしうたひ初

右　我正

春の夜やふとくむやすらひ哥

左の句ハ句ひもすべ伽羅ぶしのうたへけれどとおゝつゞる
哥侍る　右も又春の夜ハ婦くも大きにいちもてしよ大
音の吟しきまつれ侍れども一番三十きまた八剃句ひけらみて
ほつゝそめ侍りて仍左を為勝

二番

左勝

紅梅は清らかなりやねくのいらんふくろ　此男子

右

只今と梅をこのむや大休みし　蛇足

左の紅いらんふくろハ大坂ふるやす丸の黄金よりも小判
なりけれハ尤くし　右梅を只今このむ也大桜ハむかしの[illegible]
寺[illegible]し待ぬるとすかりきてん梅の花さきとかなしむ大桜の花
句にかの待ハ今にもほれされと花ハ寂さす冬のひとつの[illegible]
とりくらのらん袋ハ趣向もとまかお袋とてらるれハ左の宗匠
にて宗匠法ハ天男ひとまりてたゝ以為勝

三番

左

ぬくもりやけさ御所の法師旬以る　嘯節

右勝

薮手まもらうひすゐうかやお竹かな　哉也

左御所の松をかきしみのとかをを句以さるの法にさされ
さらけよくさまつけたるになれとも左のおもひかな
薮手まもいうすくいや薮の裁りを深くいくつも読て見るに
百姓の納米のくさみはさて堂々と寺法のないとゆるなけん

四番

左

きうこ猫ハ寺の春をたんしまうかや　佐余母

右勝

寒えつけおもひや猫ならうさんけ　和正

猫ハすこしめくてあつけなきさる春の句ならしきかねてといふ也
さて六ツ花の花をうつしとりてふるまひのことくして紫式部の
いろめくまゝさしかし難られすてきのことくに侍る
右ハ猫のらしきれしさ山家をつく月今宵なるかされけるへよ似侃
まやきんすゆしすや手れ柏木のいめ入ねらしとあまくしてよう経
るらく又源氏の香を木丁のすそ打けす尺にいつまて猫の了語
のせひ殊らるけるくるの句さまさる難くなけれハ持

五番

左　持

手るゝ萩ふてうけるゝ雪の朝　　貞所

右

消ぬる雪間や鶯なきしきる　　一友

この句さへかたしこきゆへ給もしくしらぬるらく紅芸
右句ハうきすりもされたるしく六ツの花へりし左山のうけさへ
ありとれさる宮あかんらけけるに殊すく笑侍る
右の句ハあらさるか行りしてもするハ宗く後のうらさなるかなく
見まくしるにの藤おもひの気の行れてて一念とんする能定ても
たくしくまゝにもらこれしためしてもおもくらなんおとさこあぬ

六番

左　勝

きやんかに蕣れ見下すまへうし　　太極

右

尺八ゆらんとうけし山家のやつさくし　　正之
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　玄見

左の句伽羅の香を見て人一句ともやさしくきこえつくをもくしと

むく犬の尾ハしろき化気ぬまた白のうさのこしてしらぬめく
みさらしれしるつし山寺のいよ古狸ましくて小麦なれハ未
逃ぬの尾頼み狸ハ咋ふりそうれ侍ん

七番

左 持

たぐりよせんかしこ気あらハいとし桜　蘆尼

右

まち侘しなれてあられて江戸桜　代家母

左子の句ハ失左印よりと出しよくいひての乏しかれて此妻
ものとし笑しぬるかしこ気あれハあるへし
右まさしこむすよりの江戸宮になれてといひてまた風になれ是ど
併りえられし八百屋を惜むんあつくいつまて神さくおうて定持

八番

左 勝

しらくや吹降きざしの萩の花　獅子

右

降あらしハ于しのみもてわけ花もえらけ　楮子

左ハ山寺のまちの息きまたひかりれ吹降きの花の粧気けし
みかりひかりくきを勧り
右の句花の降をかさねて定おふしいて日没てかさうへ嵐
竹ふれ降をきまくらし をすみの忠を修して少々ゆきて浮世
ミ十分等一すしかさのひぬ花の枝吹八ましの時の音なれハ先
同の気の吹降をなのらふのをちへ工うしあちよられ仍左をの勝

九番

左勝

移りきつるやちよに咲し花のえだ　霞節

右

きてもみよ甚べが羽折花ころも　宗房

左は花の枝をちらされしくさは失なく候へハ縁を飾るの紐くさも
いくらハはしまで右の甚べが羽折ハきてしみよと柔おりや
とさんあれども一句の仕立もよく清らかに紫の色も
まろしものにて染るハ更に色のめづらしきやう千上右の
稲のえうみて染さらし手れハ甚ぐさ染なし衣を隔てかれくて
まけと定侍りぬ

十番

左持

吟しさらさけかけんつゝみの鴬かな　政定

右

ゆらしきや山の尾鴬ハあきやすめ　和久

左ハ日本漢の名鴬の梅に言のひとる白の深め八千紙のとう
なつもとくくえし侍る年
右の句ハ宗匠のむさうれねつねの新しきずんへといやれ年
手れくさ右をひけひけとんのみてふうく色に弁よられハお
鴬の声やくし枝をくくいろ見かちけをえさるあ
侍るめんらわきとかれす初えあめり

十一番

左　勝

時ならぬ峰の一ふりこんゑとさん　吉之

右

まくらおれ玉子ドやゝかたやうにくきく　一言

これハさかりのまくらほと気くくくと禁の中の作れ羽
も尺るするよく揃ひき

左の句ハ字のかハらの中の料るとこんをかくし部のかし
と知られて螺貝を尺よれハ玉子ドやゝねこやことよし
此のおをとこう加へと待る伴哉の松るあるよ此れハおすり
よいらんて難ありくれとたの方の句ハ時うくてハちつそ
こさしくいひもされ大持ハひられ侍りき

十二番

左　勝

小六方の本さしや菖蒲つるれの方　義子

右

菖蒲刀中や桜の木おゆくけつり　雲折

これさそ後へ小六方と後ざけだいやるでつちハうるまれ
こんでんゆるぞんゆるぞ

左の刀ハ源五兵衛とての長脇差のさやハ三文下緒ハ二文之
めし五文の強うし身ハひのやすものとなんし作る左の小方ハ
いろさいに舌を菖蒲刀れよきも本ものらし作れハ桜の
本おはり削り左刀中も及へからず

十三番

左

娘ゆり火ぞうれしく本尊ぞ娘ニつる也　適言

右　勝

ふきつかれさえん牛若が根み吹き弘　義正

かの弓木末らむすめとんふすてきさよもこゑと錦しる
てまるとく一日のえすくゝもきあらしく山寺のまのかも
久しかれとし

右の句あまんくしさえふきそしも笛すこしもてあそばれたるを
かやの木よくさせひよぶれたる上本寺のむすめなふ
まくらかくもれすむひ火つくるんをむかしのしかれいたく
右の牛根のりつゝえまさり待ぶんとし

十四番

左　持

かくそやれ小寺あふきの織とらの絵　勝之

右

扇まや折らし風か吹て来き　付入

左ハ扇の端を押う織まとろあし織さめのいろき
尚握し

右の句折そらう吹てきこしたる小寺扇よいひけふれ
これハ折そらのうえハかしこえろひやしこあてとの寸くハかりこらん
ひよんなし擒かけをしるあくのゝのしハ摸陵のまもとくくるあさぬ扇
のかなめもむくの紫本銭のみうえ骨ともえたられハえ扇角力
此かちまけれく持る物きしあし侍る

十五番

左　持

すまれらしは月やいよ比おもしろい　貞好

右

はねきるや此宵は有明のうけ　　指盞子

左ハつゝみのしらべまで侍るところあれどもすくれの
御身も月の夜あらし[illegible]
ぬしをまもるに踊の拍子も足もとや此さはきも力をぬかれ
んてさる児(?)ハさやかに[illegible]待るを興ある作と定め
[illegible]

十六番

左　勝

月の舟やこよひハどこらかゝりしや　　停雲母

右

月の行方よしなんどもつ入山　　三竿

左の月もう諸の国の書写山や寺々かゝりけるに八法清の
[illegible]月の光をもてうつし光明遍照十方世界

の[illegible]白きやはへるか

右もおもしろしかれどもうらみつゝ[illegible]
左ハやらはうは殊勝に侍りてよき[illegible]おもしろく
踊の小唄なんどハ精美のおもしろきも[illegible]
児のさし[illegible]ひとつけおもしろく
銀面つくり批判しき以左右持

十七番

左

ちよんと乗るやまかれて駒むかへ　　古之

右　勝

むらふ駒に見とれてやひんとひん　　雷斬

左伊勢の駒ハ玉ハ海にみちくるよしをいひ出し少年なれハまけ侍る

さつうハてらうるあくへし
ぬらひんらひんとくるゐ処うハおもとにほうてりと大ふ付れとも
人ゝうひてりまほひにしらやまし右のうるえひ付きられの
よれの余とうるるハちとかんゝするゐうち余りのとしうと付れ
ハふとうる仰えのほしすよきと八手くりてのつれへきし

十八番

左　勝

はすの上と大たいこかな稲の末　　適意

右

かゝしうれ稲のわのじに京女龍　　城次

右の句大きなるもしらえて稲の末うゆひたくされしうきつうさ
こゝろへてかう集めて頭のことふぬ句作うえてうるの也よ

すゝやかし
又右の京ハ女郎とかのしハゆかゆとすむくなのうるめて守らむ
よみうるへ稲のものをおうれハ本書あうふぬ法をかくるを
見け申ハさしおそて田のひうちうえハくちゝへとえしたうを
徳とさしとめ田

十九番

左　持

それ息もむきてくんのむ新酒かな　　此男子

右

酒のめとはくてめうゆる新酒かな　　哉也

右の句の新酒味ひいつさうときゝくてうえた鼻息もおきて
くんのむ新酒ハ如うれてとこして講はあけのきうてる句作し

左の句煙のめしこそとはいへど一ツすべしゆきてあかゆゑとてよそろ
れし風情のよきハさしつけし実はすくなくしらめあされハ
よき事ニふるされしくていつもの勝すけをまえさせめ
侍らめとお見もひとつ分にや

二十番

左　勝

髯ゑとしもしらしや小野か手鉄炮　政輝

右

女丈夫や毛すそ毛も擬にて毛むしり　宗房

右の女丈夫も小袖とこそ夢しけれ侍る八分の筵の出来
ものゝおのかは嫌手小野手髯のけさとまで有侍ら
しよりむよくとよう合されさるやくしそ正ゆのうてつやう

とうとうぞ思はれて鉄炮のすいかうなく打ちはなれぬる事の
ましさこうれハ火縄のひなんと申すべしやしかれし
右の女丈夫ゆゑしく論をまんも毛むしりとされハ何事
き眉毛なりしやうさめのを侍るぬ

二十一番

左

作男髯の妻の名をゆかし霧の末　鼻毛

右　勝

みつ萩やかすり狩に去れかへの毛　石口

右萩を妻の妻としつらきかのしくしさひらかれ侍れを
ころ萩の俤そけれど去ぬたこうなる鉄炮て心のたくを
侍ハりし只つらく成すれちやらい一句とすつてくくきのひと分れ

今さら左の沓あへてうらかしく風情は大いなれなるとや
なさん

二十二番

左　勝

ゑやけくハ右のまろみは紅葉かな　三木

右

もみち葉に赤き尺とるの枝の岸　故足

左の句紅葉のきめしの作意し
右の句よくひゐけハよはおさまらぬうし（挫）を殊了しハ
景風れしぬすむうてるを中竹らぬ人あらくし左の沽めか
右の手は赤く手ハいつまん意をハまへもの了紅葉の不知を
大まてをも作万里のたりひれハてるめてしなく打言

をまねてみゆるは木乃あらハ一本とけくのつれく

二十三番

左　勝

ありたしやめれうけ花生小みか雨　餘淋

右

きくつ杵やさくうやうし寛し笠　改当

左のめれうけ花生ハ川のもの志れもの襖子志らぬの
通ふものとやいふならん
右の句さんつさやうらしまん志ゆんきぬとらさへハひつさよ
しやまんハきてといへるハしられとかなてめれよあら
なるかれる志られハいやハ天のあらさとの雨ふり志川流しぬれ
うけ花生を勝のかちとや定めむ

二十四番

左 持

酒の酔やすゝてもちのみなる足　　餘淋

右

かし南の代のちんどう足をみえ　　三竿

左の酒の酔ハたとへに一座みてなく足もしハよろしく
弱く作られても一句としてよろしくあれて二つのふめ了
男ハかけれとも是ハおもしろく作りて右のちんどう足とみし
とふうすふれかし南ハ天の業をふしところうす御作の狭
業もちの恋愛もすられて情をみ得よく足の筋骨
もたくおもしろれハ他者のちからも強さしきていうとくまる
おもしきれたるかけれハ持

二十五番

左

走りてうたゝしめるのはみゝく笑ひ　　鼻毛

右 勝

天ふられ風に本のしやとおかし めき　　一入

左の句さあらてくる句やふめといくれしハうられのう[illegible]
天ハいかられとおもしろくて句やふめの九ハ天未のしや
と云も葉をとられ酒をかゝしとる八桶の庭に流くいの
うふれ桜のかくをもあやくなく句なれハかん瑞のかさめとも
天ハかちのうちとさとめぬされとおもて ひとつるを耳
絶て月もちらし雲のみそれ酒のしらみ遠ひとつや又ん
うをうそ仮也るとうさのつく句作りさうれ

二十六番

左　持　　勝之

まよふ身そかへりみけるおいらくの

右　　　　珠次

よしさらでおいのさかりの月のかけ

ためしなきみのはしはかへりみくまて京へおもひつゝ

くじけのこされは老のくり習て月を惜きつらき

てらしおもふへし

此歌は左右さへ相なりてさとも出つとちゆはされとも

そげよくてひ有髪のひのけし見えてもかへりたる勝

おいけのまいちるをきかんのおみかざへのおゝかたつらく

何に例は此むかしてまよさりかんでよりて於とき

その寄の人のそしりにおもふ事のちゝられとあやまれん

はなしきんめでたし

二十七番

左　　　　正之

紗のはなの松の緑もこんの空のいろ

右　勝　　義正

降りしきるちやしく香ごもりふじ山

左のうたは絲の布に見立られたるものゝ見はけしきさか

あらそひし峰にいとのよきやうにやうやうに見えそれ

然る佗をかれ松のひとつのいろの小寺のうへはあかく

一白のとくにかはしもの

右は土にしは高くさふしぬたる香多くれにて勝とすなるき

不二子ハ似つかしき眉としくく侍らんと左の流行体を安
らかに申けるを右ハまされりともいふへきやや侍らん

二十八番

左 持　　　　　　　　　　　　小吉勝 吉勝

炭の花や付しるしはうんじ香

右　　　　　　　　　　　　　　養勝

炭うしろ手やずんといふ木じや

左炭ともうたてたるけしきなるハ侍るなし。えんさまは
ゆきさやかれく一句とよくいはるゝみのけがされぬ花にし
ての句すんといふ木をとふかれし毒のよくたんへとも
けりとされハを文けし炭しをきんとのほりへの持原
子を添てや炭かすの口しいうとも持つくて持と定

二十九番

左 持

掃除して歓楽なき引や炭俵こそ　　　　　　　　不屈

右

炭焼や此のち先祖ハよくさけき　　　　　　　　一入

左炭よう掃除しえんとはいへし掃除しけるハすまあるる
をかれくれく奇観なる哉句し
右ハ此中しらくわすれれ此のち先祖ハよくおもしろきと不知
炭焼をおかされたる其炭俵を加へよみけて哉へ入侍れとも
えんをよくさりれへのもの此まへるく此方の座こしえん
の持にてやすのみとて持と定まるハをとらしきおとゆかの発
ゆかん哉のうつや持らんとし

三十番

左 勝

犬の頭やいきうびきやどんの神こそ 此男子

右

首ゑやそこらみの出る神子神子 一友

左の犬の顔の白きをうす人似の居ふるに阿りわらいきうび社
糟もうこそ御社のおやぢさんと御遊ん咄ぶれ末社の仲
こうれこやしまきもいまふひどにをかさふけるきんつす
しうらひがくおぎしらふ侍る
右のきりふ葬をひとく千ゆかしさ千らふまむ似ゑかれハ
ますけの上のやけるへしとく息哭延命の神ゞあぐと
首のほうのきまへとて

松前相ゝ方かさみんなしてお手伽此等を経をくとく去彼ヶ風
情社子ゝちやきも山肴ゝ参色より神ゝく横出すれしゝゝ解う
行ゝよの山の花のまゝ渭水のきれ雲あをとひ首西の海の月の
お耳江東の雪を尺をと撰子此詩まふりんて農夫とし於人を
出たれ事ゝち詩の作五十句を得ゝ事のふつくる往復の
養のまくう出れゝを毛つく男をと名付ゝと云ゝおもへし仍
以之於詩翁の和を獲より於詞花集ゝ後中を奉て呑
逸ゝ翁くはよかりくる者くきく大江の千里八百首の添を
詩の題を示ゝひ近がの女角八伽ゝ詩をを人の人ゝ従
千里同様中ふるて錢和ル出くれとし以へは家ゝれそとて
似ゝうしゝれさて仁寿そとらるまゝくれしゝさても

延宝八歳次

庚申仲秋日

嵐亭治助序

田舎之句合

第一番

左 勝

霞消て富士をはだかに雪肥たり

ねりまの農夫

右

菜摘せし白魚をかへす隅田川

かさいの野人

左の句は春の一句にして尤ゆたかにして長高し
まて神代の作霊妙にしてゆるくと見ふる不二のけ
しき雪肥たりとは承前古人春雪瘦たりと作せる
作為なるべしや右の句菜摘といひて隅田川に白魚を
ねりひかる一興なりし山の隅田川の流たゆみなし

第二番

左　勝

春の水やうちふく硯の手をはなれ　農文

右

引のゝの葉をそゝの下春の韻　野人

岩冨をとおし昔のハ水きりくしてそれから後の文義之か存する懐素か自叙帖の筆のくりもうるもし右は句編すとをとれ

第三

左　持

柳の根暇ゆの法うまさの則し　農文

右

寒梅や蝙蝠にふたつみへて　野人

左の句は式句ともに待るかの山居の烟雨に青々たるしから巳ニ黄ニナンとスト似たる梅の詩を作らる黄作つよくいさゝか優ほう文柄すつよふからう者まきせ殺集句ゆよかとも又つよし左は大和絵也大和絵甚しく色絵にて法院の筆を捨てよ文筆をともよけらん

第四

左

陶淵明米つきも古里やおもふ　農文

右　勝

乞食の家まれ自ら寄る　野人

乞食スルニ宮食の家まれ自ら寄る翁の詩を米つきも古里をと思ふ表源なふぬれこれは右はまたは宮食の身の寄る故しらのは火のさくる

ちとしへハ批言の批をも忘つれとも

第五

左 持　　農夫

梅利狂人呼かけしや花ふゝて

右　　沙人

桜狩名もなき園見られさくらかな

梅利をいひて花下にたゝすみし狂人深切し又園見の茶の

壺のきらふなやまし上巳合中の桜を見物したる作

ト生の方かけたる白進書甚おかし

第六

左　　農夫

傾ていふて富もあらくしよふてふ

右 勝　　沙人

鴬もまた来て立てたり鳥やや

嬉しかる事を先年吟じ始まして此るをも彼作れハ俳

諧の事俳諧ときんで笑ふ見のよし又もとめ重き歌説

に姑獲鳥をこしきて声よそに言ひてかれ似ても

狩桜なくとし且此の句此家と茶や霧のやらく

まる道返きへとものし似きそかくへしや

第七

左　　農夫

今の手かへて浄瑠璃座のますみれ

右 勝　　沙人

何とく羽織紬ハ無しと紗ハ涼し

まつらん道よくも十符わたれたり文相打にえん勝られ中庸
の中を用ひて志つよくむすし道才言の入るを留の関守と
すゝんのきゝ子ましのみれゝ仍以文相識を勝とし定侍る

第八

左　勝　　　　忠文

詠カルく鵲ささや砕ほとゝきす草の戸に

右　　　　桃人

竹も宗祇のうたやきゝうしれ

草の庵の杯の念仏先祖勝宗祇のうたとよみけしよれ
あるも読てしかまねよりきのひゞきなくきゝうしけれ
とよみたる心ゝや詠まとしもうけそそし用ひんとされ
ともはけ者のきゝう上の仰るを勝まさす心ゆえる所なり

可ナラシヤ

第九

左　持　　　　忠文

雲雀の麦草子まとゝそろゝふとふ

右　　　　桃人

捨る乙の当種子かる秋もそ詠みぬ

雲雀の麦八勢蘭の旅勤をしらん冥霊大椿を論す
よも例よう又捨る乙の当種子秋ゆかなく加の二葉吹くよなし
れ上風としよみまからも秋のつくもたれハ宰相ハ家の花実

第十

いつ迄をとのとふん

左　　　　忠文

蘆の花や海むらす舳すきれ浪

右 勝　　池人

何をとも見すほん叩かんと月雨闇

蘆の花のいきまよひ小夫ひの飛ちらふけしき涼しく
見ほとし右の句ハ川縁の竟の田舎の夕やみ何をとはやく
飛そ叩かるよんの竹る小夫ひそ持へおまへ何とれとす八
条ヲ香く勝ん

第十一

左 持　　雲文

むりし月に花さく宿も陳皮さく

右　　池人

破き火に夕への伝白しぐれし八

枝に留おかけしとおもへる岸辺木の緑青とともるけしく
住みもしとるふ右又か中りの枝の中に朗く尺つる先の径の白
く咲く折に十和 柳の色と何かそ又わしく待つぬ

第十二

左　　嵐文

石の枕に髄(スジ)をはりくる今の草枝

右 勝　　池人

芝梅の涼しき苦夏の志をえし思ふ

石の枕古今もし芭木の草枝の理学にひろやの露
とや且芝看の夫まとかの志の能石すし御おもし詞し
さとめかすしさひやまさく涼し

第十三

左勝　　思丈

柳のしだりも百二三筋八おもおもし

右　　埜人

萩にみりし髑髏踊る萩の声

百二筋の柳のおもハ美人の心ニ秋きふれんと似かよる詩の心をおもひよせられたるやおもし髑髏の萩の声もかゝるさまこそ又ふとあらたの趣にハ定侍る

第十四

左持　　思丈

月のさかりに詩の舟にも山市にも川武に

右　　埜人

さて宮の戸ゆ結ひて雲に八なかし月

公任卿詩歌の舟に寄て其詩をよみのせしこれハ嵐山一九川武の舟もたとへ叩ていかに寄てまた寄てもふまへたるハ八幸も高木の板戸もさまでの詩も似かよひしたる月よりよきに又至る紫の戸を結ひさし然れハ持なり

第十五

左持　　思丈

誂へ遠る画舎やしまえ那須追

右　　埜人

元方波瀾行徳こえて江戸の海

画舎闘の那ある

浪ゆの波瀾眺望いつれも勝ちなかるへし

第十六番

左 勝　　　　其丈

不限者本来ハ秋の夕暮をも捨よ

右　　　　沾人

秋の心法師ハ作れ寓意

先年の句西行法師の寓意作れとこそあれともさまでの本にあらす
やまと句なりしかるを仍て大隅山玉城寺の和尚にまよひて
問フ答テ佐かなしき寺ありて観するの本れ一路をえくだけられん
ぬれ袖のかなしきぬ君をかねてしも仍て左の句閑に入

第十七番

左　　　　其丈

枯の町妻恥て尤ゆ恋の哉

右 勝　　　　沾人

芋を植て雨を聞風のやどり哉

枯の句里の枯といへんハ古しとし旅の町とハ云妻恋の康
ハ秋にふれしと妻恋のまことにいひしへ射於の中に作有て
いさゝか似たるやうにや又芋の葉の雨をも人のめんハやさしく添へし
くさひしき作る趣心なれしこれ奇叙景の雨の聞えて捨
おもふ秋月前芭蕉と作として寺をえ似せられて右勝るへし

第十八番

左 勝　　　　其丈

白露の葉の露蒲萄かつみ廿寄る

右　　　　沾人

紀路行山をみかんみかよし桜哉

蕉をつよしと俤なしとふかく葛の甘露なるをかり
九の句ハ作意子が句よ
葛の色や利休が目にハよしみ山に俤見えて手にとらる僕の
侘しさの余りや端しゆきとなりさんめんよりの競ひとてうつくしく
侍れと甘露の一滴すら味もたかくとものするなくへし

第十九番

左

鳴る夜松松の雫すと宝り　楚丈

右　勝

木うつしと見れぬ蜩生の声也聞へ　池人

初句三拙な秋乃色乃句ハおもしろくかへりてしかり夜松の雫
見事ひとしく蜩生のしつさ見えてさみしくさりとてもかれが角の
上手なりとそれ見えたりいつれも甘みあんや

第二十番

左　持

墨染の袖のいろかかるし雪の菊　のりふ

右

時雨をいく筋ほしりかは夜袖もろく　や人

陰山の白くろ袖の色とうるかるよ鴫の鳴なつる汲泉
此句も袖もろくつしもや雨の露をもさん見して遠く出らう

第廿一番

左　持

傍手を探して一樽の茶菓子味ゆるのし　農丈

右　野人

火燵のこしかたねや夢は古葉を枕にす
口切の一句まつの緑をとり出し茶袋を洗ふ唐茶漬
飯の集ハいかれさ枕助すや又火燵のうしくねの書ハ列子曰
陽氣壯則夢渉大火燔爇又精衰則夢蛇ここ是
を以ておもしろき火燵の物にて取つかる所を書きんすまし
ものゆへ持

第二十二

左　持　　嵐丈

雪折て居る竹の掛筆みえされハ

右　　雅人

雲てらくハこのれも蘇鉄の女郎

左の句ハ竹のしきる雪を風情を見せよあれど風情なし遠山

右の句ハはしめを見て吟ぜる花竹さく峰に雪の松の竹を
見て一人人家をなしたるハ山里のさひしさすてとのさひ合
きよらかなり又古希の句てふ川の流る時雨かきりなく定め
かたしとのいふよりもひとつかなし白し

第二十三

左　勝　　嵐文

詩人ゆるを松江の鱸と名付ん

右　　柳人

鱸子らに餘所に居て食ふ鱸

全体の趣ひとのしいのれぞ鱸の膾を詩にみなしめけて
牡松江のかとんさえつる方ハ鱸にハふぐ古風ハ鱸過を
おもしろくしるハ又左の鱸膾を食すくなてきれ

うつとよらへひてわ上ミをつて用捨有へし

第二十四番

左 持

畠山家く嫁味噌　せん丈

果たのめらのみそ浮世すれは納豆汁と

右

寄貧家しみ秋　堅人

一寄翁し味噌汁蛤を炊くも

紫雲英の森の木かし吹切れて枯くなる春の林に

かへ住めのみそ壹斗入て乾坤をわすれる隠士世界を

世用坊と家子分くし人の貧家なして多知を俺

つの作宮者をとふをくするしれむ表揮あとは之へしとも

隣家の蛤より当田お於めそのみそを売さんかんもすし

第二十五番

左　農夫

町所に店おおみそのうけそうつくし

右 持　野人

ふるうし手の気をちつくし無さ之撒揃は

店おのなうけそ貧甲さんは一句をこうし ふるうし事の

何それやとしても見を歎美すへし

栩々斎主桃青漫援毫判

餉のなる木みさくら咲て餅をあみちをゆつてそのと
むとよまで飴の音して四月今ぞ営の路をひとり
其味の澁くあるをきにきをもす

秋風子

営萄屋之句合

第一番

左　勝

芽ぶきて千八百延の新千芳し

右

こ引も小松の客北もさま了閑

左の芽千八百延の新て椒をゆつきひ営ら葉すて初音
安ちさる心絶すまてなる跡の客北そら千葉年すさうて子
日の松をし引よゑさてめてまく作あらせ先八百延の千子の
かくよくしま千中とくまり作る仍以左為勝

第二番

左

くやなからぬ干物の本月をくるれ

右 勝

花よりも秋月よりの事み紅葉

右干物の本月もまた見るべくあるけしおもふなり

月よりの色ありて又見る那なき中時なる一つしまきしにも
よろも

自ひかうべし

第三番

左 持

芹とる翁碧潭にとゞんでこしゆる

右

防風ゆるく吹く青銅漸く盡して

碧潭に望みて芹とる翁蘆氷をふむとし危ふし防風田

こく吹く事孤の翁句にことさらしや左の勝ちあ

いつとなし峯をかざしてはけられた堤防の四季をかへ見れバ

照むなしと生ずる人きそう父の杖にすがり急無に木

より芹をつみしく人のふりそでしく捨ててふらん秀れ

是此少年からくれ後野老先生をさかのぼりたして

即もさぬ

第四番

左 持

老わらしんにおつてしちよろ木の人ありつか

右

ほ首やくされ草雑のちきれよう

方の自己なくしぶ翁の頭をし築ろうハ是新清か

論それとうそのすきひまやしやさしくぬく又ほらさの

くやなりぬ千鳥の本因をくるに

右　勝

花よりも桜月よりのまかみ紅色

左千鳥の本因をまちうけあふえりけりしおもふかう

因りとのるおそれ多ふ為れるも守待る一低まさしにも
よきを

旬ひわらしくし

第三番

左　持

芹とる翁碧潭にうつしてこほりけり

右

防風ゆるく吹て青銅浙く盃して

碧潭にうつし芹とる翁薄氷をふむひとし危ふに防風の

こく吹く青銅の浙翁物ともせすしや在わすけちの

いつとのし労をかさしっゝけろうれるぬふの咄をそとれ

縦むそくしと生るえ人さゝらひの杖さすゝり急無に本

より芹をとらぬもく人ゝふけたゝしかくし粋へふれ秀れ

是此ゆすかくれ作者の先生をらかのをかうとこえて

即ちまぬ

第四番

左　持

さわらしむ袖つくしちよろ木にんろうか

右

ほ首やくされ芋雑のちきれよう

方の目三つゝしむ袖の粉として柔らかるへし是新清か

袖されとうすゝのすきひるやしやさしくぬく又ほうちさの

春夢の市よりも高値なるけしきにて物むつかしげなれど
南月とさそふ深ふしくおもしろく侍る

第五十五

左 勝

まろきさへ蟹の爪木に斧の音

右

茂けさは紫そしこのみ京うてんのうち
予山内をやかましく田舎の光丈の語りしを若きさへ植
豆かしこの元蟹の木くこれを嗅ふと此雛此其そ
紅やまつさ化工しさかる爪木の丁々まるひ山東画
こりなる又茂けさ紫さきあの何もるも以ほりそ中よ下き
たのまさへ越情多し

第五十六

左

さくら菊萄いりあへみ何を以さくら

右 負

千大根よりも菜を定て和らかく色
楊子何くもさくらこそわくす花えつれは白かれは経営
豆腐ともさすれなとしいそんの且一杯の豆のはかり前れ秘
おけしきりと和らしく侍れとも手大根のうまき定すやら
わりそりて乞して千文の八一分新ちか似しくて此よ大菜の
まとんし秋と定法も勝負も

第五十七

左

蝶のり崇蝿の隠らす潜しゟ

右　勝

鶴語の子等蝕れし山は松本の丸

むかし芭蕉の信茶さつ以の圃手寐さるまて玩し　又又難れ山の
うちの大木まろもこそ隠るるも寄し只山いつもの雲か中山海
語りもせし此かし　先伝ふるる郷度莫の野ふ法てきしさ為
雨ら彼大標をも許さるのためしとせんはかられさらうの大木
又とも多くし

第八

左

柳のちりてまつ前にもし社いくれ荒

右　勝

教人山桃を炭は薪紫よし

花柳のうちつ堅く芸くいへつあつ上戸の袖の白ひそこゑる
うしちんなとは設人のみ手れぬ本目蔵のうち葉すえらえ
風流優すやさし

第九

左

夕へうら田　雨　杜　鵑　穿　豆

右　勝

麦飯や　さしつ八　葉は　柳そして
あのもう前の夕ひさいしさのいうんとして穿豆といふ時
あつ國あつるきさ集そし中のし侍れるも葉の右ありぬ
麦飯すす粮政ぶしなれ

第十

左　持

きり麦の切もミじかき命かな

右

夕顔や色若衆のおもかけそめ

右は栽国のかほとなりて萬葉集の二首にもとしのうち花の…五麦の日本の人れも聞ゆ…いろはの命を切…利根にあらしむかしの流れの女上の命不食切れて己らあらしを引かしてハのちの人れ…種麦あまん天地にゆるして…あるあまたの梅流の中に流れ上人とも…ふれ又…統に入て高く流し…にて八色若衆その名おもけあら風情ある麦の…ほかやまふんやと論するくなしてやみ

第十一

左　持

女とや茶屋のうち行かけ名染

右

山桜花垣も咲きけるよし野也

左の紫のすその花かけ茶屋の中むかし式部か娘にやかのさかりの後のそうやいろふかのものあさとおもはつきの人れよろとやあるにもあれ…の色と又山桜の垣のありけるまさしけ人ハ花れと…侍…ともよろしう八京と奈良まさり下女のよみたるうれしく…にやかしき柳のしく…ともさる法師ふん

第十二

左　勝

五月雨にそれに渡の池も…の池

右

天窓の枝折むさゝ猫の八ゝはらはら
鼓打出たる月毎の寒ゝ庵二泉や春日の光ひきをまねるかの
遍照か紅の花ゝ蕣を発せしゆきむくよあさひをおもし又
府の篝仲ゝゝひいしつきそうし我ひ老ゝる猫を放ち
気走るへしさま改りかれとて只遍照の浄子やひゝつまとろ

第十三

左　勝

返し比第木みかろしと来て出

右

新らしむや毛虫かゝ乾らされの酒な
左第本のおろし返すくしてやすしなの白ハかりきゝられ

味さゝの水ゝけいふゝる紀毛虫の新をきらんと無ゆる余のふ
鶏の子趣向を集めゝくみさゝるやうゝ完付る人耳にて
や出ゝしきさ此歩ゝ取る方ゝゝやすゝかれ

第十四

左

古そはやゆゝしも人手見大根

右　勝

初新の夏も添ゝの戸をはとしふてゝれ
家の調る走らけゆゝも人にとゆめる古そは改ふし
くゝめきゆいけ去のれゝや松葉も李豆鼓一日業し死ゝ静
うゞなの謠む無ゆ

第十五

左

里芋の孫子曽孫まで繁昌せん八

右 勝

墓ハ山とくらへて金輪際まで自然生

里芋無量の家門しかの山の墓自然墓穎生の字聞ゆ

んもハ八つらつらくらふや但自然石自然木末の影ふるしといへる

まことにきらきら上五文字力あつて一句をつらぬく心の働きから

左勝とすへし

第十六

左 勝

茶僧自在にそひて梅干の影にて実あつまり

右

乱酒の僧天窓や梅干の青き変ル

右の五文字ハ趣向もよう取り尽して梅干の精かくて見る事も

此の世大根を食しさる言葉にて此新鮮さくしやれぬる句破戒の僧を

いましめし未来梅干しのせあをもらけ焦熱の苦しみ見る趣味

噌の釜からけむりさるやとおもろしく唯茶飯喜の僧にて

殊勝に於ける左勝れ

第十七

左 勝

暮山の雨松茸のすゝしき匂ひ

右

岩ねまで木々とけ耳手事して

きみよしれしと帰る山の宿手ぬれて松茸のすゝしさを

けしき言葉の新手玄味深し此の句も一体見て事すれ

ゆゝしきものゝけの耳にやかましく覚ゆるゑの声さへきこ
もらし侍るなる

第十八番

左　勝

ゑんしをも蜜柑と金柑の名乗く曰

右

水又栗さを清しといはんとすれハ

柑を蜜柑金柑の論ハ作の中に似るをし歌の中に実をとしやく
めり数多の中の事迄此句におゐて花園の字ゆかんむ殊勝もて
しも渡栗の句ハ栗なくて水を清しとおもひてするによく云勝し
侍れとも心切りて宗祭ふらんたとく新けるかたをまくならぬ
其の句をもて以新ひをふ持と定めぬ

第十九番

左

謡ひ声ハ千歌のむすひとなれ

右　勝

ゑもし来やの々年冬瓜のひとつめる

いさゝかもとの謡ひ情千歌の詞ひとつとも絶えておほえす
たゝふりたれされとも千歌むくひと申す時ハ六月の季にあまるを秋
の句に合せんとしけるれハ又ら枯る秋の暮に冬瓜を
うらみされはひとつ残りおもしろけてゆらめくれるさまなりける

第二十番

左　持

足さ新しく造るれし

和哥浪の音異郷 非常夜の夜すからや旅

右

山寺の鐘 納豆汁 切るつや師走

左の句頭夷柏子の所より異郷を以て比叡をいふや 断千代の傳へしものを嵯峨白浪の音 比きひしきまて泣き知る さうひやうしものいはれる哀深し 右の句ハ納豆汁切る新山寺の哀やしもして寺の氣も宗を離るゝのみならハ右も句持とし きこしおほぬ

第二十一

左 勝

木からし吹風干ちらんちるかくて行くる

右

霧や八葉子千 寺房ハ埋木

よし川の新潟の浦しなかへ風の易木さわしすゝみて茅屋の閑居おもひやるへきまゝし 右の坊の埋木花を愛へ しも おうしく

第二十二

左 勝

ちらしや松浦の花に袋と白帆うち子

右

ゆけものや霧干うふみれゆれみる

ゆけるものゝみそうかいしく蓮の花葉の色をかへて よけしら物の白帆ちらほる白髪の如き女子尺ちかきを新 又霧にて言ふむかふあの姿けしきあはれとゆかしさえ 松浦の花は山へもの種なるめのしられ

第二十三

左　勝

数よしふすのゝ性えさへゐらぬ子

右

水無のとしかんてんのかんハ寒イとよむ

数ハ性ヲ註シカンテンハ文字ナトク増補献立抄ニ曰ク数ハ風味ノ切以酒煮以油煎則味愈厚シト云リ此方賞翫タルヘシ

第二十四

左　持

大松生る道なうきうしはや人し

右

宮の萩男織清川しなみて舞衣

あの月給らるゝ屋の竹子いけるゝ大松すわかもしわし

雪の中に旧国三種うしるひゐる作又珍字

第二十五

左　持

雪の竹子今ハ塩しるうなり

右

朧月にまゆ糸をきりくりとよふ

背の京宮の中の浅間河ハ見ゆさやとをうしむハなき

猿月の青物の四時の変の妙しつなひまのもる寄特れ

あてうられし

評

詩を深くも鍛ているなりし四百餘年詞人才子文読みて

かくるゝもいかで和歌に風流代てゐなくとも俳諧季ことに

変し古しに新なり今ここに甚蛇の拜くを集め二十五篇
此句合となし名を野ざらしふきよせになづけたるもの也新
しく又ふる興なり世ハ千言なり是をもし今の風俗といふべし
且つ此等先師の学文修を詠ハみちを殺し代をなるべくて此
名のみくし情をあらため此時のけしきをおもふ事甚里の俗の
事学ハ麒麟をしつけて是をたとへなし風の卯ハ膝よりつく
雲の中此花ハ御二月の初瓜も鮮の紫人参みなよく深く
居の力しの紅葉をもて此江戸ゆかし流れも此風をかく
きとびの及をかしきまず雨去まだ菊をくりにくさ夜のかきね
此作ゐ対をえてしかいきつ菜の二銭なる松茸みなあたらしき
新ツ芋の初の南瓜なつかしさをのしさきけのその花をくく
流れるしゆハをしつ中かへくれなずそて今此時をとらべきかの

かもめ瓜

于時延寶八庚申季秋日　華桃園

誹の栞

四季之句合

判者四人

春　素堂
夏　調和
秋　湖春
冬　桃青

撰者

不卜
才丸
其角

一番

左　持　蓑紫

蓑つゝぬ木葉ずりゆく雫かれ　風水

右

蓑紫より富士の流しやすき峰ひより　松濤

右の句も全く淵翔す宮を鋪ゆる丸又山を追ひて勢不二の境に一句の仕立ゆるさる所の侍るされども右中国見へる切字に五文字より二勝しされハまれ字を加へて見るべく又和解の句ふうるき餞難しき様よ定侍るべし

二番

左　勝　雲節

秋しらずはる利をかうる所の哉　渓石

右　　　　　　　　　　勇招

霜夜　涼し扇を一つさしけよるまでかね

ものいはぬものゝけにもすゞしさを持ちそれならぬ乱や祝
詠まれし扇子を持てよみ来しこのうた便りし衣腰の子
をいふとうたてや川も左の句ともなく他にふるたの句
勇逸なれハやすけ侍らんかし

三番

左　持　夜長　　　　　　　　コ齋

糸竿に月稲そよぐ夜長かな

右　　　　　　　　　　文鱗

いけも狸の失覚えて太もなし

此うたの句蔵し深く分入狩人の形容いはれのしきなり

左の句とすゝき侍るく草葉に深くみえ哀に侍れとも切哭
又相わたれかし仍以持トス

四番

左　勝　枯松　　　　　　　松風

松茸も松枯月よりかゝし乱

右　　　　　　　　　　今峰

大枝を枯野にすゝき入白雨

右の句木枯の火鉢にて松茸よせてよりも見ゆる風の
やうのあしよりつまらものく才松柏梁のすゝきそなくみえて
一句たけ高し然も又松葉の風景に得らく侍れとも
松茸の方や用ゆべく侍らん

五番

左 持　洞代

まそしまて花のゆかしき暮さはし　心水

右

けふ春のゆくへやめくりわかれ　不角

あしよろの春をふみとまる花見めつゝましてやさし

左又はしるの枕の水をとらへて言ふやましきけしき

左の方勝にまさるへし

六番

左 勝　石票

待つれ紫は流れて気也けり離れの年　洞梅

右

はな咲や待つまくし花の絵　立些

右の句はらちものほすめてゝ方を見おもしろきけん

左の旅はかひなきふかく地のしく待つ引拾し空

左の句は之てしきえ手仍ハ左為勝

七番

左 勝　鴨

紅野のありかゝりて月宮し　鳳雲

右

野くらく菜干柿に給ふかれ　魚児

すこしものありかゝる句かきり所一句安らかにして

露宮しのけしき興ある妙のはなれ宮くゝみてあれ八六月廿

日のかを言しとたけんさらにまや此の句を左に勝

ものきぬえぬためしもなくれ手待れるゝ時のもの子の

ありし猶ありしやいかん

八番

左　　水柱

風にまて水柱さへ楓ならふ　一排

右　勝

門閉て栗庵をしゆる水柱　琴風

水柱さへ楓紅のかけ汁そくかしひて丘絶よ
丸ハ新樹の影しをさ葉の緑八水柱門を守る
栗庵の庭芭蕉まろるやうに覚侍る

九番

左　おかれ

ゆりおろしの雲見え此後の雨　李下

右

素絹く吹る飛ふ玉ゆかれたる　仲風

紅風の武蔵野の霜見えわきとしいへりかくこそよりし
ゆかれ陸奥ゆし岬を乃さひしよ丸ハ又吹きのゆかれの柁し
ろむくるさき解ろ汁ふきろう山の末尺る雲海寝ら耳さそ
さらし錦妻の関のさやをさつましみえさ丸の光旅
翁まるとしゆさいし

十番

左　勝　神楽

海邪にかやと火をとも焼法寺ゆやいかん　士来

右

野も花とかしまて橋子神楽かれ　孤屋

左りの句させる数中れく見さるなを尺しの
右ハ諦をも此作を実分てた方につ右を軽ゆらと具すれ
左勝とすへし

十一番

左　勝　坂中

山里や坂中とらく人もなし　京　観水

右

坂中をしぬも古尺ちり止水中の気　廉宜

めするれぬ山中の家ゟるゝ石おちてりて楓林とゆうる
右ハ関手立て初するは此の作の人多く、いてまきくし心
さえて作りかん左かきとすへし

十二番

左　蝶掃

日すゑはさく人　蝶とかい　琴白

右　勝

蝶とうき寺まで来て　お寺卸乃乱　不卜

左くさ作のさは秋の宿を伐る亨を偲るしりて驚し右ハ寺の
蝶掃とや云ひよりうる之秋宇にや面白情秋方の中すときたし
左くれ哉いふさくさま、少しともめてまた作代にいひし白
のいきるひ打おさの中も作家も八右勝

一物将不卜のめしハ雲しき境へきさりひおもちこし赤き
雲のさ山の岩根をもとうゆうれよし脱の花も笑、をも
思ひ出の句も聞をとうえくて風雅の奴と申さと

すさく是より先に集めるをまてふうしひと柳なるいへ
とも春秋ともにゆかしきものにて東籬の菊を名
をさかしより那の牡丹も花を之をことに梅のみは
さらに無をもほかに知れ得たる人は白も文人をも投と
ろうしるひなる此をとげ人の持て今の世の為に流行しつよ
色ことに本然なるひろひのち猶なまで色ちて綾を四季に
なのまる翁士よりうつりにいたき家とも一寸土あらふまでや
楽しみてうつしものゝ菊をめでむ千代をうしなひそれ
ともまた菊の国とめでひ節操の作をもさしれてのち
この貝香卿のとし草そにの郷まそえつゝ題す
芝庭なるわの桜火をて對す